

# 下関西高等学校 進路だより

令和5年3月第2号 進路指導部

## ～あの日、どこで何をしていましたか？～

12年前の3月11日15時頃、君たちはどこで何をしていましたか？先日、3月1日に西高を卒業した、ある生徒にその質問をしたら「家でテレビを見ていました。」と答えてくれました。私はその日、前に勤めていた高校の進路指導室で、翌3月12日から始まる国公立大学の後期試験に向け、小論文や面接試験の対策を生徒と四苦八苦しなからやってきました。15時半頃のことです。ある3年生の先生が進路指導室にやってきて私に一言「先生、明日の試験はどうなりますか？」と言いました。私は後期試験のことで頭が一杯だったので、その先生が何を言っているか全く理解できず要領を得ませんでした。困ったその先生は「とにかく事務室に行ってみてください。」と言われました。事務室に行ってみると、テレビ画面に津波が海岸に押し寄せている映像が目に入りました。まだ現実が掴めない私は言葉を失いました。翌日、30校を超える後期試験は中止となりましたが、多くの大学では実施されました。あれから12年。干支も一回りしましたが、私はその間に、岩手県久慈市、釜石市、宮古市、大船渡市、陸前高田市、宮城県の気仙沼市、そして当時の在校生が復興後のまちづくりに参加している唐桑半島に4回訪問する機会に恵まれました。大船渡高校は被災当時、校長先生として奮闘されていた鈴木晃彦先生に案内をしていただきましたが、これらの場所は何回訪れても気持ちが大きく揺さぶられます。ただ、最も印象に残っていたのは7年前の真夏に陸前高田高校の生徒達とバスに乗り合わせた時の事でした。当時、陸前高田はかさ上げ工事中でダンプカーが土埃をあげてがんがん走り、重機が騒音をたてながら工事をしており「騒がしい。暑い。」で環境は最悪だなと思いました。しかし、そのような状況の中、部活動帰りの生徒達はお互いに顔を見合わせ、屈託のない明るい笑顔を浮かべながら、たわいもない話で盛り上がっていました。これは高校生の単なる日常の風景だったのですが、私は、表現できないほどの困難な状況に直面してきたと想像される高校生達がそれを見せず、明るく振舞っている姿に感動を覚え、震災のことは決して忘れてはいけないと強く思った瞬間でした。

さて、私のことはさておき、今日は2011年5月に電子情報通信学会に寄稿された岩手県のある先生の文章と同じく2011年気仙沼市の階上中学校で震災直後に举行された卒業式の代表生徒の答辞を紹介したいと思います。

### 高校生は自立していた

震災当時、私は岩手県のある高校に勤めていました。幸い震災当日、家族は花巻市におり、私も盛岡市で会議に出席していたため難を逃れましたが、陸前高田市の自宅は津波で全壊しました。留守中の管理をよく頼んでいた叔母の遺体は5月6日にあがりました。叔父と従兄弟はまだ見つかっていません。不思議と涙はでてきません。涙とは、気持ちに余裕がないと出てこない。人知を超えたものに遭遇したとき、喜怒哀楽の感情はほとんどとんでしまうのでしょうか。涙が出てくるのは、この先だと思っています。さて、避難所で一番感じたこと、それは、高校生は役に立つということです。よく働いた。本当に感動しました。

3月11日の夜、高校の第2体育館には、大勢の生徒や地域の人たちが避難してきました。雪こそ降りませんでしたが、寒くて、寒くて仕方がありません。そんなとき、生徒の誰かが「そうだ、同窓会館には毛布があるはずだ」と言い出しました。そして、余震の恐怖の中、建物から毛布や布団をあるだけ引きずりだし、被災者に配ったのです。

残念ながら、大人は役に立ちませんでした。それどころか高校生が集めた毛布を奪い合うようにしていたのです。見苦しい限りでした。翌朝、やはり高校生が少ない物資を配っているときも  
(次ページへつづく)

「もう少しよこして」という人が現れました。そのとき「大人がそんなことを言っていたら駄目だ」という声があがりました。その言葉でみんな我に返ったのです。高校生たちは寒空の中、誰も指示をしていないのに車で避難してくる人たちの交通整理もしていました。大人はうろたえるだけ。ここでは書けないこともありました。いかに高校生の存在がありがたかったか。彼らは自立していました。普段、自立していないと見えるのであれば、そうさせていたのは我々教員や大人のほうだったのです。

### **気仙沼市立階上中学校の卒業式における卒業生代表梶原裕太君の答辞 卒業生代表の言葉**

本日は未曾有の大震災の傷も癒えないさなか、私たちのために卒業式を挙げていただき、ありがとうございます。ちょうど十日前の三月十二日。春を思わせる暖かな日でした。私たちは、そのキラキラ光る日差しの中を、希望に胸を膨らませ、通い慣れたこの学舎を、五十七名揃って巣立つはずでした。前日の十一日。一足早く渡された思い出のたくさん詰まったアルバムを開き、十数時間後の卒業式に思いを馳せた友もいたことでしょう。「東日本大震災」と名付けられる天変地異が起こるとも知らずに…。階上中学校といえば「防災教育」といわれ、内外から高く評価され、十分な訓練もしていた私たちでした。しかし、自然の猛威の前には、人間の力はあまりにも無力で、私たちから大切なものを容赦なく奪っていきました。天が与えた試練というには、むごすぎるものでした。つらくて、悔しくてたまりません。時計の針は十四時四十六分を指したままです。でも時は確実に流れています。生かされた者として、顔を上げ、常に思いやりの心を持ち、強く、正しく、たくましく生きていかなければなりません。命の重さを知るには大きすぎる代償でした。しかし、苦境にあっても、天を恨まず、運命に耐え、助け合って生きていくことが、これからの私たちの使命です。私たちは今、それぞれの新しい人生の一步を踏み出します。どこにいても、何をしようとも、この地で、仲間と共有した時を忘れず、宝物として生きていきます。後輩の皆さん、階上中学校で過ごす「あたりまえ」に思える日々や友達が、いかに貴重なものかを考え、いとおしんで過ごしてください。先生方、親身のご指導、ありがとうございました。先生方が、いかに私たちを思ってくださっていたか、今になってよく分かります。地域の皆さん、これまで様々なご支援をいただき、ありがとうございました。これからもよろしくお願いいたします。お父さん、お母さん、家族の皆さん、これから私たちが歩いていく姿を見守っててください。必ず、よき社会人になります。私は、この階上中学校の生徒でいられたことを誇りに思います。最後に、本当に、本当に、ありがとうございました。

平成二十三年三月二十二日 第六十四回卒業生代表 梶原 裕太

1 番目の文章を初めて知ったのは1年前です。これを読んだとき、私はもっと高校生の自立力を信じて、それを磨くように鼓舞していかないといけないと反省した覚えがあります。高校生の力は有事では特に偉大ですが、日常でも偉大だと思います。まだ、コロナ禍と向き合いながらの毎日ですが、君たちならばこの困難を乗り越えてくれると信じています。

2 番目の梶原裕太さんの答辞の存在を知ったのは2019年7月気仙沼市にある「震災遺構・伝承館」を訪問した時でした。中で展示を見ている途中、遠くから声が聞こえてきました。何だろうと近づいていくとフロアで映像が流れており、そこでは、男子生徒が涙をぐっとこらえながら答辞を力強く読んでいました。私は震災という強烈な体験をした直後なのに歯をくいしばって前を向こうとする姿に心が大きく揺さぶられました。

君たちにとって、高い目標を掲げ、志望校にチャレンジし、合格を勝ち取るために努力を重ね、学力を身につけることはもちろん重要で、その実現に向けて的確に支援していくことは私のミッションであることは自覚しています。しかし、それだけでなく、早い時期に自分の命、時間について考えられる西高生であって欲しいと思います。そして、大学生になったら、是非、一度、東北を訪れてみてください。1年間お世話になりました。

(文責・進路指導部・松村)